



TITLE:

京大広報 No. 584

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

---

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 584. 京大広報 2003, 584: 1573-1584

ISSUE DATE:

2003-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196516>

RIGHT:



# 京大広報

No. 584

2003. 11

## 目次

### 〈大学の動き〉

- 桂キャンパス竣工式典を挙行政……………1574  
長尾総長のアメリカ合衆国訪問……………1574

### 〈部局の動き〉

- 医学部保健学科開設記念事業の開催……………1575  
飛騨天文台に新設された太陽磁場活動望遠鏡  
の披露式……………1576

### 〈寸言〉

- 国立大学法人 京大への期待 館 糾……………1577

### 〈随想〉

- 学問領域の再編成 眞崎知生……………1578

### 〈洛書〉

- 定年前あれこれ 熊谷英彦……………1579

### 〈栄誉〉

- 荒木不二洋名誉教授がポアンカレ賞を受賞……………1580

### 〈日誌〉

- ……………1580

### 〈話題〉

- 宇治キャンパス公開2003を開催……………1581  
花山・飛騨天文台の  
太陽宇宙デジタルライブ……………1582

### 〈訃報〉

- ……………1582

### 〈お知らせ〉

- 能楽鑑賞会……………1583  
文学研究科国際シンポジウム……………1584

### 〈編集後記〉

- ……………1584



桂キャンパス竣工式典  
—関連記事 本文 1574 ページ—

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

## 大学の動き

### 桂キャンパス竣工式典を挙行



挨拶を述べる長尾総長

10月1日から大学院の後期授業が開始された桂キャンパスの竣工式典、祝賀会が、10月18日（土）同キャンパスで開催され、約300人の学内外の関係者が参加した。

竣工式典は、Bクラスターに設置された桂モニュメント（時計塔）の点灯、テープカットで始まり、長尾 真総長による挨拶の後、文部科学大臣（矢野重典文部科学審議官代読）、京都府知事（麻生 純副知事代読）、梶本頼兼京都市長が祝辞を述べられた。

続いて行われた施設見学では、インテックセンター内にあるシステムシミュレーションラボ及び無響実験室等の最新鋭研究施設、教職員・学生等の交流の場であるコミュニケーションスクエア、環境に



配慮したテクニカルスリット等の完成したキャンパスを見学した。

最後に祝賀会では、長尾総長の挨拶の後、宮原秀夫大阪大学総長及び山田啓二京都府知事による祝辞に続いて、盛大な鏡開きが行われ、沢田敏男元総長による乾杯の発声の後、和やかに祝賀会が行われ、



新たなスタートを切った本学桂キャンパスの発展を祈念した。

### 長尾総長のアメリカ合衆国訪問

長尾 真総長は、9月18日から9月24日までアメリカ合衆国を訪問した。この間、カリフォルニア大学機構及びカリフォルニア大学ロサンゼルス校を訪れ、今後の学術交流の推進、特に遠隔講義のプロジェクト（TIDE：Trance-pacific Interactive Distance Education）の推進について協議した。

なお、本出張には、松本 紘宙空電波科学研究センター長、竹安邦夫大学院生命科学科教授、美濃導彦学術情報メディアセンター教授が同行した。



カリフォルニア大学機構 Vice Provost Zelmanowitz 氏らと懇談する長尾総長



## 部局の動き

## 医学部保健学科開設記念事業の開催



式辞を述べる本庶医学部長

医学部と医療技術短期大学部は、本年10月1日に設置された医学部保健学科の開設記念事業として、10月3日（金）に看板除幕式と記念植樹を、また、10月6日（月）には、ウェスティン都ホテル京都で開設記念講演会・式典・祝賀会を挙行了した。

式典には学内外の関係者約200名が出席し、本庶佑医学部長の式辞、長尾 真総長の挨拶、笹田昌孝保健学科長の学科紹介の後、加藤敏雄文部科学省高等教育局医学教育課長補佐、京都府知事（竹内出納長代読）等から祝辞が述べられた。本庶医学部長は式辞で、「京都大学医学部保健学科は、医学科とともに今日の医学を支える両輪として健康科学全般にわたる教育と研究に傾注するとともに、心の安らぎを担う優れた医療技術者を育成していくことが期待されている」とその決意が述べられた。

また、長尾総長は、「保健学科として、学際的な Health Science を学問的に確立し、体系化することにより、将来の大学院設置も念頭において、我が国の Health Science 関連領域の教育・研究の拠点となるように希望している」と挨拶された。

引き続き行われた祝賀会は、田中紘一医学部附属病院長の挨拶、京都市長（不室収入役代読）、井端泰彦京都府立医科大学長等の祝辞の後、関係者による鏡開きが行われ、沢田敏男元京都大学総長の音頭による乾杯で始められた。アトラクションとして京大グリークラブ、オーケストラ等による京大歌や唱歌などが唱われ大盛況のうちにお開きとなった。

これより前に開催された講演会では、井村裕夫前

京都大学総長が「ポストゲノム時代の医学と医療－統合医療の実現を目指して」というテーマで、21世紀の医学医療を考える上で基礎研究の急速な進歩と、効率的で質の高い医療の国民への提供について、また、日野原重明聖路加病院理事長が「健康科学のエッセンスとチーム医療のあり方－新しいサイエンスとアートを求めて」というテーマで、健康（Health）の歴史的変遷と健康科学としての「健康の樹」をどのように成長させるかについて講演され、会場には市民や学生を含め、関係教官等約500名が熱心に聴き入った。



保健学科の表札除幕式

また、前週の10月3日（金）には医療技術短期大学部玄関前で、長尾総長、塩田浩平総長補佐、本間政雄事務局長をはじめ学内関係者約40名の出席により、保健学科の表札除幕式と記念植樹が行われ、長尾総長から「健康科学の精神で、研究や教育に努め



記念植樹を行う長尾総長

てほしい」と喜びが語られた。そして記念植樹は、ギリシャの医聖ヒポクラテスにちなんで、人々の健康と医療技術は永遠であることを願ってプラタナスの木が植樹された。

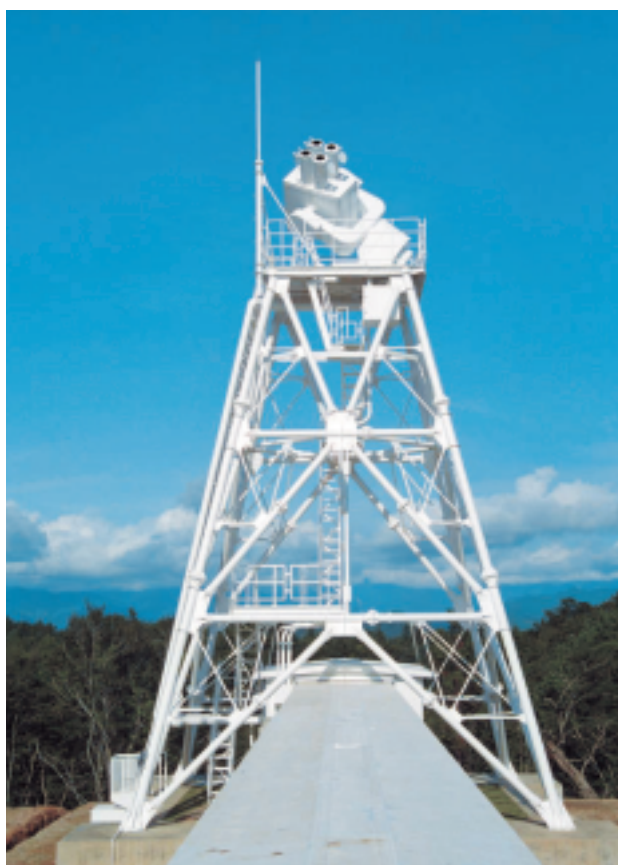
（医学部・医療技術短期大学部）



## 飛騨天文台に新設された太陽磁場活動望遠鏡の披露式

大学院理学研究科附属天文台は、岐阜県上宝村の飛騨天文台に、最新式の太陽磁場活動望遠鏡（Solar Magnetic Activity Research Telescope : SMART）を完成させ、その披露式と祝賀会を10月15日（水）に長尾 真総長、小池 強上宝村長らの来賓・関係者約70名の出席を得て行った。

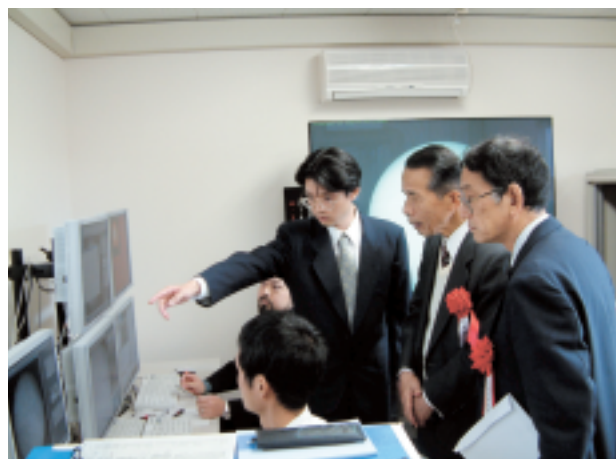
同望遠鏡は機能が異なる4本の撮像システムを内蔵しており、高さ16mの鉄塔上に設置されている。



太陽全面を一度に撮像できる望遠鏡としては世界最高分解能を実現しており、太陽全面の磁場の強さと方向の変化を測定し、それによって発生する太陽フレアなどの爆発現象を発生前から捉えて、それらの発生メカニズムを解明しようとするものである。これらの研究は、地球の気候変動や電波障害、宇宙飛行士の被爆などの予測研究につながり、また他の恒星・銀河で発生している高エネルギー爆発現象の解明につながることが期待されている。

飛騨天文台で行われた式典では、黒河宏企台長の開会の辞、笹尾 登理学研究科長の式辞に続いて、長尾総長から祝辞があり、テープカットが行われた。観測室の見学の後、会場を上宝トーカイホテルに移して、祝賀会を行った。長尾総長の音頭で乾杯した後、天文台教官による当望遠鏡の紹介講演があり、小池上宝村長、小杉健郎宇宙航空研究開発機構教授、桜井 隆国立天文台教授らから祝辞が述べられた。本望遠鏡の完成を契機に飛騨天文台が全国の教育研究機関にますます活用されることが期待される。

（大学院理学研究科）



## 寸言

## 国立大学法人 京大への期待

館 糾

私は現在、78歳である。1950年に大学を卒業して鐘淵化学工業株式会社に入社して以来、今日まで約半世紀にわたり化学を生業としてきた。敗戦後の日本の化学工業と共に生き、業界や学会の仕事もいろいろとさせていただいた。



これらの私の拙い経験を踏まえて、法人化する新しい京大への期待を述べさせていただきたい。

私は、20世紀と21世紀では考え方の基準が全く異なるのではないかと考えている。というのも、世界の人口の増加が地球環境の悪化を大きく加速し始めたからである。現在の予測では、いま地球上に約63億の人が住み、2050年には90億に達するといわれている。しかも、先進国と発展途上国との経済格差は、ますます開きそうだ。

現在、世界人口の4%強しかいないアメリカ人が、世界の25%のエネルギーを使っている一方で、世界の20%の人達が1日1ドル以下で生活しているという報告もある。

産業革命以来、45億年かかって作られた地球の資源が膨大に消費され、各国が経済発展を達成させればさせるほど、地球環境は急速に悪化している。特に、アジアは21世紀前半には世界最大の生産基地になることは確実であると共に、世界人口の50%以上が住むことになり、そこに生活する人々の質の向上により、資源、エネルギーの消費量は急速に拡大する。と同時に、アジアは水、食糧を含む地球環境問題が最初に深刻になる地域であると思う。

私がいままで生きてきた時代は、敗戦後の飢餓時代や石油ショックの苦しい時代はあったが、上記のような世界規模の問題はなく、先進国のアメリカやヨーロッパに経済を含む全ての面で、追いつくことが目標だった。すでに前例があり、目標ははっきりしており、苦労はあったがやり易く、生きがいのある時代であった。特に、日本を取り巻く全ての環境が良く、日本は得意の品質管理技術で製品の改良と製造の合理化において、世界に例のない経済発展を遂げた。その後、経済の停滞と共に、情報システムとかゲノム関係の新しい学問や産業に大きな遅れが

出てきて、ここ数年、政府主導により、国家戦略として産官学をあげて、欧米に追いつき追い越そうとしているのが現状である。

私は国立大学の法人化が平成16年度から実施と決まったのは、非常に良いことだと思っている。

日本の国立大学には、いままで、形式上は学長に権限があったのであろうが、教授会が実権を握っていたのが実態であった。組織のトップに権限がなければ、改革などできるものではない。会社であれば、世界での競争に敗れば潰れる。これからの大学も同じ様になるだろう。

私は、大学は「人材育成の場」であると共に「知の創造の場」でもあると思う。京大の先生方が学生を自分の研究の手足として使うのではなく、学生の能力を引き出し、倫理観のある専門性と幅広い科学知識があり、これからの国際競争で一本立ちできる大きな夢を持った創造的学生を育てて欲しい。世界各国、特にアジアの国々の学生が、世界の中で京大を選ぶ様な魅力あるユニークな大学を作って欲しい。

また、大学の知を社会へ拡散させる場としてTLO (Technology Licensing Organization (技術移転機関)) があるが、大学は知を創造することが一番大切なことであり、効率主義、短期主義の世界の流れに流されないことを望みたい。TLOにより、産、官、学がお互いにスクラムを組むことは非常に良いことであるが、大学の本分が「知の創造」にあることを肝に銘じていただきたい。

私は前記したように、21世紀の最大の問題は地球環境悪化だと思っている。特にアジアにおける悪化がひどい。これを改善する科学の基本的部分を、日本の大学が作り上げることが、日本がアジア各国から感謝されることだと思う。

いままでの日本は、基礎から応用までの新たな枠組みを作ることをしたことはほとんどなかったが、この仕事を産・官・学で作りが上がることができれば、素晴らしいことだと思う。非常に困難な問題だが、是非、京大が世界に先駆けて、この問題の解決に立ち向かわれることを期待したい。

(たち ただす 鐘淵化学工業株式会社 相談役  
昭和25年 農学部卒)



## 随想

## 学問領域の再編成

眞崎 知生



私が定年で京大を退職してから5年になります。それほど時間がたっていないのに大学の姿が次第に遠ざかる感を拭えません。かつて自分の居た場所がなくなるという感じでした。キャンパスの移転、病院や様々な建物の改築も目につくのですが、それよりも学問の方法や内容が大きく変わることによる学問領域の不安定さが目につくのです。

私が京大に赴任したのはもう10数年も前のことになります。昭和の初めに建てられた医学部の医化学薬理棟2階に居を構えました。しっかりした建物ではありましたが、窓は隙間だらけで、通用口の戸は完全には閉まらない状態でした。それでも教室は活気に溢れ24時間実験室の燈火は消えたことがなかったように思います。私の前任者の藤原元始先生は循環系薬理学を専門とされておりました。まだ古典薬理学の色彩が強くマグヌス管につるしたモルモットの腸管の収縮や、動物の血圧測定などが重要な手法でした。教室には先輩が昔ヨーロッパから大切に持ち帰ったキモグライオンという腸管や血管の収縮測定装置、あるいはかなり努力して集められたと思われる薬種標本が大切に保管されていました。そのような場所に私が前任地より、かなりの数の測定分析機器、道具を持ち込んだため、電力が足りず、回線の増設をお願いするなどの御迷惑をおかけしたことも思い出されます。このことは、その時代も薬理学の手法が変わりつつあったことを示しています。

19世紀のヨーロッパで生まれた薬理学は本来生理学の一分野であり臨床と深く結びついていた学問でしたが、これがドイツの大学に入ってから動物を用いて薬物と生体の相互作用を調べ、さらには新しい生体機能を解明するという学問へと変わって行きました。特に戦後アメリカの影響を受け、生化学的手法が導入されました。

その後、分子生物学的手法が誰にでも使えるようになり、この方法によって薬理学もきわめて明解な結果を得ることができるようになったのです。本学

の医化学の故沼正作先生のアセチルコリン受容体の実体の解明はその代表で、薬理学の分野に於ける大きな貢献です。

私の在任中、医学部正門脇に5階建の新しい研究棟が建てられ、医化学、薬理学教室は移転しました。折しも大講座制の大学院大学がスタートしました。大学は学問の新しい流れに即応できるようになったと思いました。教室の中も新しいプロジェクトに対応すべく古い設備は一掃されました。

分子生物学的手法が一般化されるにしたがい生命科学の各領域間の敷居が低くなり、薬理学領域にも他分野の研究者が参入しやすくなりました。しかしそれで薬理学会の会員が増えるかというとそうでもありません。逆に薬理学者は良い研究成果を他学会の雑誌に発表するようになりました。薬理学のアイデンティティがよく理解されていないからだと思っています。

私は京大を去ってから一時国立循環器病センターに身をおきました。丁度その頃、ヒトゲノムの全構造が近々明らかになるということで、その成果を有効に応用しようという国家プロジェクトがスタートしました。センターも大きく揺れました。疾病とゲノム構造との関連が主なテーマであったのですが、その中にゲノム情報を創薬に応用するというゲノム創薬という動きがあります。ゲノム創薬を叫ぶ人は薬理学の領域外の人に多いように思います。もともと薬理学は創薬を目ざした学問という人が多いので、我々は薬理学の主体性をもう一度考えなければなりません。創薬を効率的に行うためにはゲノム情報は有用ではありますが、これによって実際のところ創薬の基本が変わるわけではありません。

このように薬理学と周辺の領域の垣根が低くなっていることは事実です。薬理学に限らず他の学問領域でも再編成が必要な時期ではないでしょうか。人文社会学系と理科系の学問の間でも同じだろうと思われます。大学全体の組織改編もこれに沿って行われるべきではないかと思います。今後どのように学問領域が整理されて行くのか興味をもたれます。

(まさき ともお 元医学部教授、平成10年退官、専門は薬理学)



## 洛書

## 定年前あれこれ

熊谷 英彦



「洛書」に何か書けという依頼が突然きた。書くことはあまり得意ではない。締め切りまでに時間もない。期限が迫っている他のこともいっぱいある。先ずは断った。「私は、本年度限りで定年ですの

で」と。すると、「定年前だからこそ是非お願いします」ときた。どうも定年前の先生方がよく書いているらしい。断るより引き受けてしまう方がその場はすぐ済んで面倒はない。じゃあやってみましょうかということになってしまった。

いざ引き受けて前に書いた人のものを見ると、内容が立派で、きちんとした主張がある。自分にはこれといったフィロソフィーも、主張もない。そこで居直ってタイトルのようなことで済まそうと思う。

定年と停年、二通りの書き方がある。どうも辞める当人を気遣って、定年の方が使われているようだ。俺はまだまだやれるという気持ちがあるが、定めだから辞めなければと諦める当人の気持ちを思いやる気遣いであろう。これは「諦念」に通じる。定年を迎えた先生方が良く口にする言葉は、「無事にここまで来れてほっとした」、「これからは難しい時代だからいい時に辞められる」などである。他人からの挨拶としても、おめでとうございますと言われる。しかし当事者の気持ちは、人によって差があるであろうが、ほっとしたという気持ちと、まだやれるという気持ちが多かれ少なかれ交互したものではないだろうか。

自分自身を振り返ってみると、先ず体の機能の衰えを自覚せざるを得ない。物や人の名前がなかなか出てこない、視力や聴力もおちた。全体に、体に気を使わないと健康ではいられないようになってきている。それに反して世の中の進歩は著しい。身近で感じるのは、実験機器やその道具立ての進歩である。私の専門は応用微生物学分野である。遺伝子を扱うが、その解析機器の進歩は素晴らしい。一日に数千

の遺伝子の文字を読んでしまう。また、酵母の遺伝子六千の配列が明らかになっているが、その一つずつを欠損した株約四千をひとセットで買うことができる。六千の遺伝子のうち二千は欠損させると酵母は生育できないので残り全部で四千株なのである。これを購入して自分が目的とする遺伝子を選び出せる。大変便利であるが高価でもある。こういった進歩についていけなくなっている。こういう便利さを無視しては他に遅れることは分るが、方法を自分で考え出してそれを生かしていくことが研究上大事だと思う。

あれやこれやを総合すると、定年はやはり仕方がない、区切りをつけるという意味では意義がある。理にかなった制度だと納得せざるを得ない。十分承知しているつもりだったが、総長から「定年退職日通知書」というものが来て定年を再認識した。こんな通知があるとは知らなかった。覚悟を迫る最後通牒だ。それ以来、定年まであと何日とパソコンに記して過ごしている。以前は、最後の一年はゆっくりできるだろうとなんとなく考えていたが甘かった。大学は勿論、学会その他から結構重要な役が舞い込んでくる。定年後の身の処し方も考えなければならぬ。さてどうしようか。分っていることは、のんびりすることなどはとても期待できず、このままさらに忙しくなるだろうということと、その後もあまり変わらない生活だろうということだ。

アメリカのNIH（国立衛生研究所）では、80歳になろうかという大家の先生が、それも夫婦と一緒にまだ実験をしている。我が国とは、科学に対する一般的な考え方や歴史の違いが大きいことを感じる。

（くまがい ひでひこ 生命科学研究科教授 専門は微生物細胞機構学）

## 栄誉

### 荒木不二洋名誉教授がポアンカレ賞を受賞

荒木不二洋名誉教授が、日本人として初めてポアンカレ賞を受賞された。授賞式は7月30日、リスボン大学で開催された第14回数理解物理学国際コンGRESS（ICMP）において行われた。



ポアンカレ賞は、19世紀後半から20世紀初めにかけて数学、物理学の分野で大きな足跡を残したH.ポアンカレにちなんで1977年に創設され、同賞受賞者が翌年にフィールズ賞を受賞するなど数理解物理学に関する国際的権威を有するもので、国際数理解物理学会が3年毎に授与している。

同名誉教授は、昭和32年京都大学大学院理学研究科修士課程を修了、同大学工学部助手、同講師、同数理解析研究所助教授を経て、同41年教授に就任、応用解析第二研究部門を担当された。この間、昭和35年プリンストン大学 Ph.D、同36年京都大学理学

博士を授与され、平成8年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。また、数理解析研究所長、京都大学評議員として、大学の管理運営に貢献された。本学退官後は、平成8年から13年まで東京理科大学理工学部教授を務められた。

今回の受賞は、場の量子論と量子統計力学の基礎及び作用素環論についてのライフワークに対するものである。同名誉教授の業績は多岐に亘るが、代数的場の量子論の基礎概念である局所物理量が及ぼす作用素環の構造及びその表現論やそれに基づく散乱理論の記述は、今日 Araki-Haag-Kastler 理論として広く知られている。また、無限量子系の統計力学において熱平衡状態を特徴付ける変分原理の研究や、相対エントロピーの概念の一般的定式化など、物理学と数学の境界領域における同名誉教授による数多くの傑出した業績が高く評価されたものである。

(数理解析研究所)

## 日誌

2003.9.1 ~ 9.30

- |                          |                     |
|--------------------------|---------------------|
| 9月2日 保健衛生委員会             | 19日 入学者選抜方法研究委員会    |
| 5日 全学教育シンポジウム（6日まで）      | 24日 大学入試センター試験実施委員会 |
| 16日 評議会                  | 26日 総長選挙（27日まで）     |
| 大学院審議会                   | 29日 学位授与式           |
| 17日 国際交流会館委員会            | 30日 韓国・東義大学校 金寅壽総長  |
| 国際交流委員会                  | 他3名来学、総長他と懇談        |
| 18日 総長、アメリカ合衆国を訪問（24日まで） |                     |

## 話題

## 宇治キャンパス公開2003を開催

去る平成15年10月3日（金）、4日（土）に「第7回宇治キャンパス公開2003」が開催された。

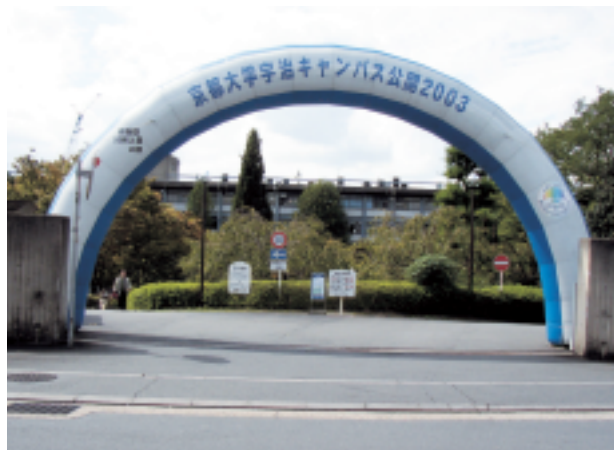
この企画は今年で7回目を迎え、宇治地区の4研究所・1センター、図書館宇治分館及び宇治地区に研究室を置く研究科等並びに防災研究所宇治川オープンラボラトリーが参加して行われた。実施内容は、「人類の生存基盤を探究する情報科学」を統一テーマに、各研究所等の研究活動を一覧できる総合展示、公開ラボ、公開講演会であった。また、日程についても昨年は1日のみの公開であったが、今年度は、3日（13：00～16：30）、4日（9：30～16：30）の2日間にわたり公開を実施した。参加者は、初日は約110名、2日目は約440名、さらに宇治川オープンラボラトリーでは約60名、計610名と多くの参加者を得た。

総合展示では、各研究所等から詳細な説明が行わ

れ、公開ラボでは、曲げ木加工の実演等参加者自ら体験するなど楽しい実験が実施された。公開講演会では、生命の理解を目指す情報科学～バイオインフォマティクス～（化学研究所助教授 五斗 進）、コンピュータでみる地図—地理情報システム（GIS）（防災研究所助手 畑山満則）、計算が拓く宇宙科学の明日（宙空電波科学研究センター教授 大村善治）と題して講演が行われ、好評のうちに終了した。また、初日の夜には、この春改修された生協にて、教職員、学生の懇親会が行われ、約400名の参加を得て盛会であった。

法人化を迎える次年度も、最先端の研究を広く公開し、より一層開かれた大学として地域との交流はもちろん、産学連携の推進も画っていきたい。

（宇治キャンパス公開2003実行委員会）





## 花山・飛騨天文台の太陽宇宙デジタルライブ

大学院理学研究科附属花山天文台と飛騨天文台では、「太陽宇宙デジタルライブ」と銘打った同時一般公開を10月11日（土）に行った。天文台の最新望遠鏡設備やそれによる観測の説明をはじめとして、花山・飛騨両天文台をインターネットで結んで、互いの望遠鏡や太陽画像をリアルタイムで見ながら、説明と質問を交換する「デジタルライブ」や、「ミニ講演会」、「望遠鏡や分光器、火星儀やスペースシャトル模型などの工作教室」、「太陽電池パネルで動く

おもちゃの実演」、「天文台歴史館」、「世界の天文学コーナー」、「彗星製作実演」など、盛り沢山のコーナーが用意された。当日は、天候には恵まれなかったが、花山天文台では約450人、飛騨天文台では約150人の参加者で賑わい、どのコーナーも好評であった。特に飛騨天文台では、夕方になって晴れ間が広がり、65cm屈折望遠鏡での火星観望が間に合っ  
て、皆さんに6万年ぶりに大接近した火星の南極の白い氷や赤茶けた地面を見てもらうことが出来た。



## 訃報

このたび、小寺<sup>こてら</sup> 昭次郎<sup>しょうじろう</sup>名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に同名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

### 小寺 昭次郎 名誉教授

小寺昭次郎先生は、9月29日逝去された。享年72。

先生は、昭和29年3月京都大学文学部を卒業後、同大学院で学ばれた後、同32年10月京都学芸大学講師、同35年4月京都大学教養部講師、助教授、教授を経て、平成4年総合人間学部教授に就任された。同6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門はドイツ文学で、とくに第一次世界大

戦後のドイツ文学を主な研究領域とし、なかでもワイマール共和国期の社会と文学に焦点をあて、ベッヒャーを中心としたプロレタリア革命文学の研究に取り組み、綿密な分析と鋭い考察により多くの優れた業績を挙げられた。また、これらの研究を基盤とした翻訳についても、詩人の思想と言葉への深い理解によって各方面から高い評価を得ている。

(大学院人間・環境学研究科)

## お知らせ

## 能楽鑑賞会

課外教養行事の一環として、日本の伝統芸能の能楽鑑賞会を以下のとおり企画しました。本学学生・教職員各位におかれましては、是非この機会に狂言と能楽を堪能してください。

来場をお待ちしております。

日 時 平成15年12月 9 日 (火)  
午後 6 時00分開場  
6 時30分開演  
(開演後の入場はご遠慮願います。)  
8 時30分終演予定

会 場 京都観世会館  
京都市左京区岡崎円勝寺町44 TEL 771-6114  
(東山仁王門を東へ約300メートル)

演 目 狂 言 「千<sup>ち</sup>鳥<sup>どり</sup>」 茂山 千五郎  
茂山 千作 他  
  
能 楽 「野<sup>の</sup>宮<sup>のみや</sup>」 片山 九郎右衛門  
福王 茂十郎  
茂山 七五三 他

## 備 考

- 入場無料 (入場の際は、学生証または職員証を呈示してください。)
- プログラムは当日会場で配付します。
- 定員は550名、先着順とします。
- 問い合わせ先：

学生部学生課課外教養担当 (TEL 753-2511)

(学生部)

## 文学研究科国際シンポジウム

21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」  
文学と言語に見る異文化意識

1. 日 時：12月6日（土）10：30～17：00

2. 場 所：文学研究科新館第3講義室

3. プログラム：

講 演	江戸前期の女性と漢籍（日本語）	ケンブリッジ大学教授	ピーター・コーニツキ
報告1	国文学と中国文学－「鏡」について－	教授	大 谷 雅 夫
報告2	若きウィーン派と日本	教授	西 村 雅 樹
報告3	言語からみる「古代ウイグル」の世界	教授	庄垣内 正 弘

4. 定 員：200名（当日先着順）

5. 参 加 費：無 料（申込不要）

6. 問い合わせ先：文学部庶務掛

TEL 753-2700

詳細は文学研究科ホームページをご覧ください。

<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/symposium/sympo031206.html>

## 編集後記

京大広報11月号をお届けします。もう今年も残すところ二ヶ月を切りました。11月という月を古人は「雪待ち月」と呼んでいたとききました。大学から仰ぐ山がうっすらと白く見える日も近いようです。広報の編集に関わるようになって七ヶ月。めまぐるしい動きの只中にある今の大学の様子が、様々な部局から送られてくる原稿からもうかがわれ、それを皆様にお伝えすることの大切さと大変さを痛感するばかりです。編集作業といっても、まずは送られてきた原稿の言葉や表現のチェックから始まりますが、これがまた大変。普段なにげなく使っていた言葉でも、広報に載せる原稿の中に置かれるとまた違った表情を呈してきます。わかりやすい日本語が決して、味わいのある日本語であるとは限りません。でも通じなければ困ります。教育詩学という、ちょっと言葉にこだわった仕事をしている者にとって、広報の日本語との格闘は大変ですがまた楽しい時間でもあります。そうそう、それから到着の遅い原稿を待つというのも編集作業の一つです。でも原稿が遅くていつも編集者を泣かせている私には大きなことは言えません。実はこの原稿も遅れてます。とにかく今月こそは原稿ならぬ雪を待つ月が皆様に訪れますよう祈っていたのですが。

(鈴木記)

## 【訂正】

前号（No.583）「大学の動き」欄掲載の「平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」採択結果について」の記事図（1553ページ）中、「自立学習型 CALL」とあるのは「自律学習型 CALL」の誤りでした。お詫びして訂正いたします。